

農之本也。若肆然而盡之，則來歲將何以濟？國用邪？不食穀種，則吾之志而竊欲以報國也。吾守死而已矣。汝勿復言氣息奄々，遂枕麥囊而死矣。則九月二十三日也。因人感其義氣，僉稱曰「義農」。

安永五年代官增田惟貞、義農作兵衛ノ墓碑ヲ營ム。丹波成美其文ヲ撰ミ、尾崎時春書之。其文末章ニ云：

郡官增田惟貞適省其墓詳其實以白于官憐恤作兵衛死且謂民風之所系恐口碑有時而亡爲新其石勒其事每歲與米一包於其子孫給祭祀以旌異於閭里距死蓋四十五年云。

〔とはすがたり〕このごろ○保頃事にや貧しきをのこ人にやとはれであさましき世をふるに人にも見すべき程のをんな子ありきはめてかほよし、その友きたりて、そこのをんな子のいろよきに、うかれめにもうれかし、さらばやすくて世をわたらんものをといへば、いなうらじ、すて子なりしものをといふ、さらばいよくうれかし、誠の子だに玄かするもあるをといへば、をのこかしらふりて、かれすてられしいにしへ、をのれ見つけて、あなびんなや、あはれおほしたてんとてこそひろひつれ、貧しき時うらんとては、ひろはぬものを、今はたむかしにそむかんや、いと貧しがるをのこなりとも、むこと名づけてあはせんとて、つひにうけ引いろなし、義をしるといふべし。

### 〔山陽遺稿三〕百合傳

百合者、不知何許人也。或曰、江戸人也。爲人明慧、絃索鍼黹、一見輒解。既爲阿穀所養、習其母所爲、喜好吟咏、日著茜裙、捧茗供客、而儉閑輒手筆研花香鳥語、隨觸入題、性不甚裝飾、而天姿娟秀潔白、淡粧常服、楚楚動人、過者無不留連。都下貴介豪富子弟、多屬意者、少年自喜者、或傳粉顧影以求當其心、百合不顧也。百合有所素、暱德山某者、爲幕府士人子、爽俊人也、因事流寓都下、落魄不能自活、百合爲之傾竭心力、因得不乏、如斯者有年、有孕生一女、情好益篤、會德山氏宗家嗣絕、族人議取某繼之、乃使使者